

[auto + N] vs. [N + auto] :
フランス語の複合名詞における切除語彙素の位置の問題

古賀 健太郎

0. はじめに

現代フランス語の複合名詞では以下のような「被限定—限定」の語順、つまり主要部名詞 (N1) が前方に置かれ、後方にはその補部として別の名詞 (N2) や関係形容詞 (AdjR) ¹⁾ が置かれるのが普通である。

(1) a. assurance chômage (N1: 主要部 + N2) 失業保険

b. assurance scolaire (N1: 主要部 + AdjR) 学資保険

その一方で、逆の「限定—被限定」の順を呈するケースは、la grève attitude (ストライキに打って出る戦術: cf. Loock 2012: 5) のようないわゆる仏製英語 (franglais) や、Orlyval²⁾ (オルリーヴァル: オルリー空港連絡新交通システムの名称) のような商品・サービスなどの固有名詞として用いられる場合などを除けば、auto などの擬似接頭辞 (préfixoïde) が主要部名詞に付加された以下のような構造に限られるだろう。³⁾

(2) a. autoroute (N1: 擬似接頭辞 + N2: 主要部) 自動車専用道路

b. vélotourisme (N1: 擬似接頭辞 + N2: 主要部) サイクルツーリズム

ところで、ここに挙げた擬似接頭辞は、いずれも切除された語彙素であるという点と、それ自体が自由形態素としても現れ得るという点が特徴的である。例えば auto は「自動車」を意味する automobile を切除した形式であり、autocorrection (自己修正) などにおける auto- (自分の) とは異なる。さらには (1) と同じように、これらの語彙素が主要部名詞の後方に (N2 として) 出現し得ることも興味深い。

(3) a. réparation auto (N1: 主要部 + N2) 自動車修理

b. parking vélo (N1: 主要部 + N2) 自転車駐輪場

したがってこれら切除された語彙素は補部として、主要部名詞の前方にも後方にも置くことが出来るということになりそうだが、果たしてあらゆる切除語彙素で同様のことが可能なのか、補部を前方に置いた構造と後方に置いた構造との間に互換性はあるのか。また、結果的に同形となる新古典的複合語の第一構成素 (e.g. autocorrection の auto-) との棲み分けはどのようになっているのだろうか。本稿では auto や vélo などの語末が «-o» の切除語彙素に着目し、上記の問題について考察していく。

1. 語末が «-o» の切除語彙素

フランス語における切除 (truncation) に見られる傾向として以下の3点が挙げられる。1点目は切除の方法である。Groud & Serna (1996: XIII) は、観察された切除語彙素のうち語尾音消失 (apocope) によるものが、語頭音消失 (aphérèse) によるものに比べて圧倒的に多かったと報告している。2点目は切除後の音節につ

いてである。音節数は2音節になることが大多数であり、それに続いて *fac* < *faculté* (大学, 学部) のような CVC 型の1音節、および *parano* < *paranoïa* (偏執病) のように3音節になるケースも一定数観察される (cf. Delaplace 1999 : 51-52)。また切除後の最終音節については、Groud & Serna (1996 : XIII-XV) の調査によると、開音節になるものが49%、閉音節になるものは51%であったという。⁴⁾ 3点目の特徴は、切除後の語末が開音節の場合、その母音は [o] であることが圧倒的に多いという点である。先の Groud & Serna (1996 : XIII-XV) の調査では、*bio* や *auto* をはじめとする語末が [o] の語は165種類あった一方で、それ以外の母音で終わる語は合計で73種類にとどまったという結果が示されている。⁵⁾

つまり多くの場合、語頭から1音節目 (但し CVC) から3音節目までを残す形で切除が行われ、その結果、開音節になる場合と閉音節になる場合が大体半々となるほか、語末が開音節の場合は [o] で終わる語が多数を占めるということになる。⁶⁾

ところで、語末が [o] になる切除には以下の3種類があることが指摘されている (cf. Delaplace 1999 : 51-52)。

- A. 切除点 = 元の形式の形態的境界 (e.g. *cardio* < *cardiologie* 心臓病学 : *cardio* - *logie*)
- B. 切除点 ≠ 元の形式の形態的境界 (e.g. *ado* < *adolescent* 青少年 : *adolesc* - *ent*)
- C. 切除の上、新たに -o を付加したもの (e.g. *apéro* < *apéritif* 食前酒 : *apér* - *o*)

A タイプに分類される切除語彙素は、後述する調査の結果、いずれも新古典的複合語 (*composés néoclassiques*) の第一構成素 (i.e. 擬似接頭辞) に形態的に対応するものであった。新古典的複合語の第一構成素には、主にラテン語起源のものに «-i» で終わる形式も見られるが (e.g. *fongicide* (殺菌の) の *fongi* など)、圧倒的に多いのは «-o» で終わるものである。この «-o» は借用元である古典ギリシャ語においては2つの語基を結ぶコネクターとして機能していたものである。

このタイプに属する語彙素はいずれも、擬似接頭辞が単に自由形態素として現れたものではない。例えば擬似接頭辞としての *cardio* は「心臓 (に関する)」を意味するが、切除語彙素の *cardio* は「心臓病学 (*cardiologie*)」をもっぱら意味する。このことは、切除後の形式の性が、切除前の形式のそれと一致することからもうかがえる。例えば *cardio* (心臓病学) は女性名詞であり、これは元の形式 *cardiologie* と一致する。一方男性名詞 *microphone* (マイク) を切除した *micro* はやはり男性名詞である。なお *bio* については男性名詞として現れる場合には「オーガニック製品」を意味する一方、女性名詞として現れる場合には「伝記 (*biographie* = 女性名詞)」または「生物学 (*biologie* = 女性名詞)」となる。つまりこれら切除された形式はあくまでも語彙素であり、形式上は同じに見えても擬似接頭辞そのものとは区別されるべきである。

B と C はこれに対し、元の語彙素の形態境界に沿わない箇所での切除が成されているタイプである。元の語彙素は新古典的複合語の場合もあれば、そうでない場合もある。特に C については単なる切除にとどまらず、新たに «-o» を付加している点が興味深い。この «-o» について Delaplace (1999 : 52-54) は、Frédo < Frédéric (フレデリック) などのあだ名の形成や、*intello* < *intellectuel* (インテリ) や *chéro(t)* < *cher* (値が張る) など、ネガティブなコンnotationを含み得る語で現れることに着目し、「-o」が親しみや軽蔑など

の評価的意味合いを示す要素として機能している可能性を指摘している。もしそうであれば、コノテーションの観点においては *apéritif* が無標である一方で、「-o」が付加された *apéro* は有標であると言えるだろう。

しかしこの「-o」が評価的意味を示す接辞として確固たる地位を持つていとまでは言えないだろう。例えば切除された形式の方が元の形式に対し意味的に有標となる傾向は、*ado* など切除後の語末がもともと [o] である A や B のタイプにおいても見られる。ここでもし「-o」が接辞であるならば、*ado* は *ad-o*、*vélo* (< *véloci - pède*: 自転車) は *vél-o* と分析されるべきであろうが、そもそも存在していた [o] (しかも *ado* も *vélo* も切除点として最も可能性の高い2音節目にちょうどこの母音が位置している) をないがしろにしてまで、わざわざ新たに「接辞」としての「-o」を付加する必要性を想定するのは無理があるように思える。

むしろ評価的意味の発生については、切除というプロセスそのものに求める方が妥当であるように思われる。つまり *adolescent* を切除して *ado* にしてしまうこの形態的操作自体が、評価的意味と密接に結びついている可能性がある。形態的境界を必ずしも考慮せず、主に音韻的観点に基づいた変更を施すことで意味的に有標の形式を作り出すプロセスとしては、音節の順番をひっくり返すことで俗語や隠語を作り出す *verlan* (e.g. *teuf* < *fête*: パーティー) があるが、切除はこの *verlan* と同様の特徴を示している。⁷⁾

C タイプにおける付加された「-o」については、それ自体が特定の意味や機能を持っている訳ではなく、むしろ A タイプの切除を形式的に模した類推の結果物と考えられる。先に指摘したように、新古典的複合語の第一要素の最終母音として圧倒的に多いのは [o] であるが、これがその他のタイプの切除の雛型となっている可能性がある。つまり、切除の候補地点においてたまたま [o] があればそこで切除し (B タイプ)、なければ切除の上で新たに「-o」を付加する (C タイプ) ことで A タイプに似せているということになる。

この類推によって、B・C の両タイプが少なくとも形式上は「-o」で終わる切除語彙素として、新古典的複合語由来の擬似接頭辞と表面上は同じような体裁を示すことにはなる。しかしだからと言って、*ado* や *apéro* が擬似接頭辞として [*ado*+N] や [*apéro*+N] のように、主要部名詞の前方に現れることが出来るとは限らない。この点については次節の調査で明らかにしていく。

2. 補部としての切除語彙素の位置：調査

2.1. 概要

本稿の考察のために *Le Trésor de la Langue Française informatique* (TLFi)⁸⁾ に記載されている「-o」で終わる切除語彙素 109 種類⁹⁾ をピックアップし、以下の各項目に関してどのような性質を示しているかを調査した。

- ① 切除点が形態的境界と一致するかどうか。新たな「-o」の付加があるか。
- ② 主要部名詞の補部として現れる場合、その位置は主要部の前方/後方どちらでも可能か。
- ③ 主要部の前方に置かれた場合と、後方に置かれた場合との間で意味的な相違は見られるか。

なお、あだ名 (e.g. *Frédo* < *Frédéric*) や切除とは関係のない「-o」については、調査の対象外とした。

2.2. 切除点と形態的境界の関係

まず①の問題については以下のような結果となった。このうち A タイプに分類された 30 種類の切除語彙素はいずれも、新古典的複合語の第一要素を由来とするものであった。

- A. 切除点 = 元の形式の形態的境界 (e.g. cardio) : 30 種類
- B. 切除点 ≠ 元の形式の形態的境界 (e.g. vélo) : 31 種類
- C. 切除の上、新たに «-o» を付加したもの (e.g. apéro) : 48 種類

ただし A タイプは全体の 3 分の 1 以下にとどまり、切除点が元の形態的境界に沿わない B および C も同様に観察された。特に、新たに «-o» を付加した C が 3 タイプの中で最も多かったことは興味深い。こうした傾向から、切除というプロセスが必ずしも規則的な形態操作ではないことが示唆される。

2.3. 主要部名詞の補部の位置

冒頭で指摘したように、現代フランス語の複合名詞の構成素は「被限定—限定」の順の配置になるのが普通である。したがって主要部名詞の後方であれば、いずれの切除語彙素も補部として現れることが可能である。この場合、たとえ切除前の語彙素が名詞であったとしても、統辞機能としては同様の位置に現れる関係形容詞 (AdjR) と同じものと見なせる。そのことは parking vélo の vélo のように、AdjR としての対応形式がない場合に、切除語彙素がその代用として現れる点からもうかがえる (cf. 古賀 2013)。

反対に、主要部名詞の前方に置くことが出来る切除語彙素については以下の 8 種類に限られた。切除前の形式については、形態境界をハイフンで表し (切除に関わる部分のみ)、切除後に残る部分を下線で示している。(4a)から(4e)までの 5 種類が形態境界に沿った切除 (A タイプ)、(4f)から(4h)までの 3 種類が形態境界に沿わない切除 (B タイプ) であった。ちなみに C タイプ 48 種類はいずれも主要部の前方には置けないことが分かった。このことから、たとえ新古典的複合語の構成素を模した形をしていても、当該要素自体が新古典複合語由来でない限り、擬似接頭辞化はほとんどの場合実現しないことが示唆される。

(4)	a. auto	自動車	< <u>auto</u> - mobile	autoroute	自動車専用道路
	b. chromo	カラーリトグラフ	< <u>chromo</u> - lithographie	chromo-réclame	カラーリトグラフ広告
	c. moto	バイク	< <u>moto</u> - cyclette	moto-club	バイクレーシングクラブ
	d. photo	写真	< <u>photo</u> - graphie	photo-montage	写真合成
	e. radio	ラジオ放送	< <u>radio</u> - diffusion	radiojournal	ラジオニュース
	f. vélo	自転車	< <u>véloci</u> - pède	vélotourisme	サイクルツーリズム
	g. info	情報	< <u>information</u>	infopauvreté	情報の貧困 (情報弱者)
	h. lino	リノリウム	< <u>lin</u> - oléum	linogravure	リノ版画

上に挙げた 8 種類のうち A タイプに属する 5 種類については注釈が必要である。というのも、それぞれの擬似接頭辞は新古典的複合語の第一構成素と同形異義の関係になるからである。例えば auto-は新古典的

複合語の中では「自分の、自ら」という意味で用いられる。ところが新古典的複合語も「限定—被限定」の順を取るため、形式的には(4a)と同じ構造を呈すことになる。その結果として「自分の、自ら」を意味する *auto*₁-と、「自動車の」を意味する *auto*₂-が同じ環境下で共存することになるのである (cf. Dugas 1992)。

その一方、残りの *vélo*, *info*, *lino* にはそもそも同形の擬似接頭辞はない。ただし *vélo* に関しては、本来の形態境界に沿った *véloci*-が擬似接頭辞として存在している。したがってここでは上の *auto*₁-対 *auto*₂-と同じような対立を *vélo*-と *véloci*-という2つの異なる形式の間に想定することが出来そうである。これら2種類の擬似接頭辞の対立をまとめたのが以下の表である。

表 1:2 種類の擬似接頭辞の対立

auto-	<i>auto</i> ₁ -	「自分の、自ら」	<i>autocorrection</i>	自己修正
	<i>auto</i> ₂ -	「自動車の」	<i>autoroute</i>	自動車専用道路
chromo-	<i>chromo</i> ₁ -	「色彩の」	<i>chromoprotéine</i>	色素タンパク質
	<i>chromo</i> ₂ -	「カラーリトグラフの」	<i>chromo-réclame</i>	カラーリトグラフ広告
moto-	<i>moto</i> ₁ -	「モーターの」	<i>motoculture</i>	機械化農業
	<i>moto</i> ₂ -	「バイクの」	<i>moto-club</i>	バイクレースクラブ
photo-	<i>photo</i> ₁ -	「光の」	<i>photothérapie</i>	光線療法
	<i>photo</i> ₂ -	「写真の」	<i>photo-montage</i>	写真合成
radio-	<i>radio</i> ₁ -	「放射の、無線の」	<i>radiocommande</i>	無線操縦
	<i>radio</i> ₂ -	「ラジオ放送の」	<i>radiojournal</i>	ラジオニュース
	<i>véloci</i> -	「速度の」	<i>vélocimètre</i>	検速計
	<i>vélo</i> -	「自転車の」	<i>vélotourisme</i>	サイクルツーリズム

2.4. 補部の位置と意味的な相違

表 1 から示唆されるように、新古典的複合語由来の擬似接頭辞(cf. *auto*₁-)と A タイプの切除を経て得られた擬似接頭辞(cf. *auto*₂-)は、それぞれ指示内容が異なる訳だが、このような対立が起こるのは厳密には主要部の前方に限られる。なぜなら新古典的複合語の第一構成素はあくまでも擬似接頭辞として、つまり主要部の前方にしか現れないからである。例えば *réparation auto* は「自動車の(*automobile*)修理」にはなっても「自分自身の(cf. *auto*₁-)修理」にはならない。後方位置に現れるのは切除された要素に限られる。

同じことは、A タイプながら表 1 のグループには分類されなかったものにも言える。例えば *philo* は *philosophie* または *philosophique* (哲学、哲学の) を切除した形式であり、表面上は新古典的複合語における *philo*- (好む) と同形になるが、主要部の後方に現れるのは前者の *philo* (哲学の) のみである (e.g. *filière philo* 哲学コース)。反対に前方位置での出現は *Philopop* (ル・アーヴルにある哲学同好会の名称) など、特定事物の名づけに関する限られた例を除けば、このタイプの切除語彙素には認められていない。したがって

[philo+X]の philo は「好む」、[N+philo]の philo は「哲学の」という意味でというように、出現環境に応じたある種の棲み分けが成されている。これらの点をまとめると以下の表ようになる。

表 2: auto と philo の意味と位置の分布

	主要部の前方	主要部の後方		主要部の前方	主要部の後方
auto ₁ 自分の	[auto ₁ +X]	-	philo ₁ 好む	[philo ₁ +X]	-
auto ₂ 自動車の	[auto ₂ +X]	[N+auto]	philo ₂ 哲学の	(名付けの場合のみ)	[N+philo]

ちなみに後方位置においては、philo₁ (好む) に対する -phile / -philie のように、新古典的複合語由来の要素が擬似接頭辞だけでなく擬似接尾辞としても現れる。しかしこの擬似接尾辞の場合は語末を «-o» としないので、形式上は切除語彙素(i.e. philo₂)と競合することはない。¹⁰⁾

3. 考察

3.1. 2つの問題事例

調査の結果から、新古典的複合語の擬似接頭辞と切除語彙素は、前者は主要部の前方に、後者は基本的には後方に現れる傾向にあることが分かった。ただし実例をさらに見ていくと、位置の問題では必ずしも説明出来ない事例も実際には散見される。一つ目は表 1 に挙げた auto₁、auto₂ をはじめとする 2 種類の擬似接頭辞の対立である。もう一つは逆に主要部名詞の後方において、別々の語彙素だったものがそれぞれ切除された結果、同形になるケースである。この 2 つの問題について検討していく。

3.2. [auto₂-N]: かばん語の可能性?

2 種類の擬似接頭辞が競合するのは表 1 のうち vélo- / véloci- を除く 5 種類であったが、それぞれの実例をさらに見ていくと、これらが前方に置かれた際に組み合わせることの出来る主要部名詞がかなり限られていることがうかがえる。例えば auto₂ は、大きく分けて以下の 2 種類の名詞と組み合わせる傾向にある。

I. 自動車を目的に据えた事物を示す名詞との組み合わせ

auto-école (自動車学校), autoradio (カーラジオ), autoroute (自動車道), autostoppeur (ヒッチハイカー)

II. その自動車が持つ機能や特質を示す名詞との組み合わせ

auto-arroseuse (散水車), auto-balayeuse (道路清掃車), autochenille (キャタピラ車), autobus (バス)

ただし I に関しては、むしろ主要部の後方に置かれる方が普通であり、前方に置かれるのは上に挙げた組み合わせを始めかなり限られるようである。実際自動車を目的・対象とする事物としては permis auto (自動車免許) や circuit auto (カーサーキット), voie auto (自動車レーン), émission auto (自動車情報番組), magazine auto (車情報誌) など枚挙に暇がないが、これらはいずれも各名詞の後方に auto が位置しており、逆に主要部の前方に auto が置かれた形式は *Auto magazine* (車情報誌の名前) をはじめ、名付け等で観察された以外

では見つからなかった。したがって *auto-école* や *autoroute* といった形式はそれぞれ凝結している可能性が考えられる。そして[auto₂ + N]という語形成の生産性は必ずしも高くないことがこの傾向から示唆される。

さらに II については、厳密には *auto* がもう一方の名詞の補部として機能していると言えるのか、かなり微妙なものが多い。例えば *auto-arroseuse* や *auto-balayeuse*, *autochenille* はいずれも、「自動車」の下位概念を示していると捉えれば、むしろ *auto* の方が主要部で、*arroseuse* や *balayeuse* などが補部であるとも考えられる。あるいは *autobus* (< *automobile* + *omnibus*) がそうであるように、これらを複合名詞としてではなく、むしろかばん語(*mots-valises*)の一種と見なすことも出来るだろう。

かばん語は 2 つの語彙素をそれぞれ任意の箇所 で 切除し接合することで形成されるが、切除点や切除の仕方(語頭音消失か語尾音消失か)、さらには構成素の配置に至るまで、あくまで場当たりのものが特徴である。例えば *alicament* (健康食品)は *aliment* (食品)と *médicament* (医薬品)を切除・接合したかばん語であるが、各構成素の切除点は音韻的観点を中心に定められているため、元々の形態境界については考慮されていない。さらには同じ組み合わせ・意味ながら構成素の順番を逆にした *médicaliment* という形式も存在している。後者では各構成素に存在する[a]を共有する形で切除・接合が行われており、どこまでが第一要素で、どこからが第二要素なのかさえ特定が難しい。構成素間の統辞的主従関係も必ずしも明確ではない。

このように、かばん語の形成において形態的規則性はほとんど考慮されず、一回性がかなり強いことが分かる。したがってここから形態的に高い生産性が実現される可能性はかなり低いことが予期される。かばん語の形成はむしろ創造性に基づいた現象であり、*autocorrection* のような新古典的複合語や *réparation auto* のような複合名詞をはじめとする、規則性や生産性に基づいた形成プロセスとは一線を画していると見るべきであろう(cf. ten Hacken & Smyk 2003 : 17, Fradin et al. 2009 : 32-44)。

上に挙げた II の各形式に限らず、生産性が高くないという点は、*auto-école* や *autoroute* をはじめとする [auto₂ + N]の各形式、さらには紙面の都合上実例を取り上げきれなかった [chromo₂ + N], [moto₂ + N], [photo₂ + N], [radio₂ + N], [vélo + N], [info + N], [lino + N]についても共通した傾向である。それぞれ第一要素のみが切除を伴ったかばん語の一種と捉える方が妥当なように思われる。ただし *auto*, *chromo*, *moto*, *photo*, *radio* のそれぞれの切除点は、一応は元の語彙素の形態境界に沿っている訳であり、*alicament* (または *médicaliment*) に比べると、形態的規則性に基づいたプロセスの再現の余地は残されていると言える。現に数は少ないながらも複数の [auto₂ + N]型などの形式が観察されていることから、当該構造の形成はかばん語と複合名詞の両方の特徴を示す、中間的な存在である可能性がある。¹¹⁾

3.3. 切除によって生まれた同形異義性

2 つ目の問題は、もともとは形態的に異なる語彙素同士だったものが、切除を経たことで同形となり、その結果、主要部名詞の後方において両者が同じように現れることに関してである。例えば以下の(5)と(6)の例を見てみたい。

- (5) a. réparation auto (= réparation automobile) 自動車修理
 b. assurance auto (= assurance automobile) 自動車保険
 c. industrie auto allemande (= industrie automobile allemande) ドイツの自動車産業
- (6) a. correction auto (= correction automatique) (スペルなどの) 自動修正¹²⁾
 b. réabonnement auto (= réabonnement automatique) 契約の自動更新
 c. fermeture auto des portes (= fermeture automatique ...) ドアの自動閉扉

(5)の auto は auto₂と同じく automobile (自動車の) の切除であるのに対し、(6)は automatique (自動の) を切除した auto が主要部名詞の補部として現れたものである。いずれも A タイプの切除であるが、主要部の後方においては両者の形式上の区別がつかなくなる。

先行研究では、切除後の形式の指示対象は元の語彙素の指示対象より特定化されることが指摘されている。Kerleroux (1999:97-102)は、切除が可能なのは人、物、行い、出来事などの名付けに関わる時であると指摘した上で、場合によってはさらなる指示対象の特定化も見られることを報告している。例えば colonie (植民地、集落) を切除した colo は、もっぱら colonie de vacances (林間/臨海学校) を示し、その他の colonie を colo には出来ない。同様に crocodile (ワニ) は、材質としての「わに革」の場合に限り croco というかたちに切除出来るという。これを言い換えれば、crocodile という名詞が持つ複数の意味から、特定のものだけを抽出して記号化したものが croco だと言うことにもなるだろう。

Kerleroux の指摘通りであれば、切除によって特定の語彙素における多義性の問題が解消されるはずである。たしかに(5)の auto も「自動で動く(automobile)」もののうち「自動車」だけを示すという点で colo や croco と同じ傾向を示している。しかし(6)のように automatique でも切除が起こり、結果として同形ながら別物の auto がもたらされたことにより、今度は同形異義性の問題がもたらされたのである。もちろん元をたどれば automobile と automatique という2つの異なる語彙素である点に変わりはないが、形式面で両者の弁別が容易ではなくなるリスクを冒してまで切除が実行されることがあるという点は注目に値するだろう。

同様の問題は bio (<biologique)でも見られる。形容詞 biologique には「生物の、生物学的な」という元来の意味に加えて「オーガニックの」という新しい意味が現れた。後者を意味する男性名詞として le bio があることを考えると、主要部名詞に後置された bio が(7)のように「オーガニックの」の意味でもっぱら用いられることが期待されるが、実際はそうとは限らない。(8)の bio は「生物の、生物学的な」を表している。

- (7) La vente de produits bio se fait encore majoritairement en grandes surfaces (45%) et magasins spécialisés bio (37%), puis en direct des producteurs (13%) et auprès d'artisans commerçants (5%).¹³⁾

オーガニック製品の販売の多くは大規模小売店 (45%) やオーガニック専門店 (37%)、そして生産者直売 (13%) や個人業者 (5%) で成されている。

- (8) Tu reprogramme donc ton horloge bio en calquant également plus facilement ton alternance veille-sommeil avec celle de la région où tu te trouves.¹⁴⁾

そうやって体内時計をセットし直すわけ。そしたら覚醒と睡眠の交替をより簡単に、君がいる地域のやつにスライド出来るんだよ。

2つの意味の混同は、主要部となる名詞の意味特性によって、多くの場合は回避されるだろう。「オーガニック」に関わる事物としては、畜産農業やその生産物、流通経路などが該当し、*horloge*（(抽象的な意味での)時計）のような名詞とはそもそも意味特性が合いづらいからである。しかしながら中には *magazine bio* (生物学情報誌/オーガニック情報誌) や *filère bio* (生物学コース/オーガニック関連産業) のように、いずれの意味でも解釈出来る余地が示唆される名詞との組み合わせも見られない訳ではない¹⁵⁾。切除語彙素 *bio* が元の *biologique* の多義性をほぼそのまま引き継いでいる限り、この2つの意味の混同のリスクは完全にはゼロにはならないだろう。

4. 終わりに

切除語彙素は切除点の観点から3種類に分類されたが、新古典的複合語の擬似接頭辞と形式的に符合するかたちで切除されるものは、調査した109種類のうち3分の1以下にとどまった。このうち主要部名詞の前方に置くことが出来るのは *auto* をはじめとする5種類に限られた。これら例外的なケースを除けば、基本的には主要部名詞の前方に置けるのは新古典的複合語由来の擬似接頭辞であるのに対し、後方に置けるのは切除語彙素であり、出現位置に関して両者の間には一定の棲み分けが成されている。*[auto₂+N]* や *[vélo+N]* などに関しては、組み合わせ可能性や主要部のあり方などの特徴から、かばん語に近い性質を示していることが示唆された。また、切除によって同一語彙素内での多義性が解消される可能性がある一方、別の結果として同形異義性の問題が生じたり、元の語彙素の多義性が保持され得ることも明らかになった。

¹⁾ 関係形容詞(*adjectifs de relation*)は主要部名詞の補部として機能し、下位範疇の構築など分類的な性質を示す。この点が属性叙述的性質の品質形容詞(*adjectifs qualificatifs*)との違いである。関係形容詞の先行研究については Bartning (1980), Bosredon (1988), Gross (1988), Monceaux (1992)などを参照。

²⁾ *val* は *véhicule automatique léger* (自動運転小型車両)の略号である。

³⁾ *chauffeur-secrétaire* (運転手兼秘書)のような並置型の複合名詞は、本稿の考察対象には含まない。

⁴⁾ 語末が閉音節の場合には、多い順に以下の子音が見られたと Groud & Serna (1996)は報告している: [k] (29件), [t] (29件), [m] (27件), [f] (23件), [b] (22件), [p] (19件) (以下省略)

⁵⁾ [o] (165件), [a] (31件), [i] (19件), [y] (13件), [e] (8件), [ø] (1件), [ɔ] (1件) (ibid.)

⁶⁾ 一方で、切除点の位置や切除形式の表記法には揺れが見られる。例えば *traditionnel(le)* (伝統的な)を切除した形式としては *tradi / trad' / trad* の3種類が見られる。複数形の *s* の付加も統一されていない。

⁷⁾ ただし切除された形式の方が意味的に常に有標とは限らない (cf. Fradin 2003 : 211-212)。例えば *méto* (地下鉄) はもともと (*chemin de fer*) *métropolitain* を略したものであるが、前者は現在では意味的には無標であり、むしろわざわざ (*chemin de fer*) *métropolitain* を用いる方が有標となる可能性がある。

⁸⁾ « www.atilf.fr/tlfi », ATILF - CNRS & Université de Lorraine.

⁹⁾ この中に *adolescent* の切除形式 *ado* は記載がなかった。

¹⁰⁾ さらに言うと、これら擬似接尾辞と組み合わせる要素は多くの場合、新古典的複合語の擬似接頭辞 (e.g. *bibliophile* 愛読家)か、切除語彙素 (e.g. *cinéophile* 映画好き : *ciné* < *cinéma*)であり、必ずしもあらゆる名詞や形容詞と組み合わせ可能という訳ではないようである。

¹¹⁾ このIIの各形式の形成に関連して Dal & Amiot (2008 : 107-108)は、2つの構成素をつなぐ母音[o]を含んだ [*Y-o+X*] という語形成モデルが想定出来ることを指摘している。この母音[o]が当該位置に存在すること

で、既存の新古典的複合語と同じ「限定 (Y) —被限定 (X)」の語順による語形成を、ある程度の規則性をもって実現することが出来ると考えられる。

¹²⁾ autocorrection (自己修正) とは異なり、後置された auto は automatique (自動の) を示している。

¹³⁾ « www.franceinter.fr/economie/les-magasins-bio-ne-connaissent-pas-la-crise » 2017年5月24日。下線は筆者。

¹⁴⁾ « www.routard.com/forum_message/783507/decalage_horaire.htm », 2017年4月30日参照。下線は筆者による。なお原文では où が ou になっているが、これは誤植と判断し、修正したものを掲載している。

¹⁵⁾ ただし filière bio に関しては、切除前のもとの形式が厳密には異なっている。「生物学コース」は filière biologie である一方、「オーガニック関連産業」は filière biologique である。

参考文献

Barthning, I. (1980) *Remarques sur la syntaxe et la sémantique des pseudo-adjectifs dénominaux en français*, Stockholm : Almqvist & Wiksell International.

Beciri, H. (1997) « Dérivés, composés... A propos des affixes », *Cahier du CIEL*, 1996-1997, pp.49-72.

Bosredon, B. (1988) « Un adjectif de trop : l'adjectif de relation », *L'information grammaticale*, 37-1, pp.3-7.

Dal, G. & Amiot, D. (2008) « Composition néoclassique en français et ordre des constituants », Dany Amiot (éd.), *La composition dans une perspective typologique*, Arras : Artois Presses Université, pp. 89-113.

Delaplace, D. (1999) « *Parano, perpète, polar(d), redingue et situasse* ou comment l'apocope parvient à certaines de ses fins... », *Sillexicales*, 2, publication de l'UMR 8528 du CNRS (SILEX) – Université de Lille III, pp.49-58.

Dugas, A. (1992) « Le préfixe auto- », *Langue française*, 96, pp. 20-29.

Fradin, B. (2003) *Nouvelles approches en morphologie*, Paris : PUF.

Fradin, B., Montermini, F. & Plénat, M. (2009) « Morphologie grammaticale et extragrammaticale », *Aperçus de morphologie du français*, Bernard Fradin, Françoise Kerleroux et Marc Plénat (sous la direction de), Saint-Denis : Presses Universitaires de Vincennes, pp.21-45.

Gross, G. (1988) « Degré de figement des noms composés », *Langages*, 90, pp.57-72.

Groud, C. & Serna, N. (1996) *Regards sur la troncation en français contemporain*, Paris : Didier Érudition.

ten Hacken, P. & Smyk, D. (2003) « Le rôle de l'analogie et des règles dans la formation des mots », *Morphosyntaxe du lexique*, vol.2, Gilles Col & Jean-Paul Régis (éds.), Rennes : Presses universitaires de Rennes, pp.11-26.

Kerleroux, F. (1999) « Sur quelles bases opère l'apocope ? », *Sillexicales*, 2, publication de l'UMR 8528 du CNRS (SILEX) – Université de Lille III, pp.95-106.

Lehmann, A. & Martin-Berthet, F. (1998) *Introduction à la lexicologie*, 3ème édition (2010), Paris : Armand Colin.

Loock, R. (2012) "The emergence of Noun + Noun constructions with a regressive order in contemporary French?", *Journal of French Language Studies*, First View Article, September 2012, pp. 1-21.

Monceaux, A. (1992) « Un exemple de formation productive de composés de structure nom adjectif », *Langue française*, 96, pp.74-87.

古賀健太郎 (2013) 「関係形容詞の欠如を補完する名詞について」, 『ふらんぼー』39, 東京外国語大学フランス語研究室, pp.110-130.